

コラム 27：赤坂の夜

(' 13・11・7)

あれは今年の8月終わり、猛暑の頃でした。「元歌手 藤圭子」が、新宿のビルから投身自殺をしました。享年62歳、わたしと同世代の人たちは、ほとんどの人が名前の記憶ぐらいはあると思います。TV画面から姿を消して、ずいぶん久しいですから、若い世代には、「宇多田ヒカルのお母さん」と言わないと通じないかも知れませんね。

彼女のデビューは1969年。十代の若さに似合わぬ浪曲調の「ドスのきいた」声で、自らの人生と世の中を、恨むがごとく歌う姿は衝撃的でしたよ。彼女の歌を称して、「これは演歌でも艶歌でもない。これは怨歌である」というようなことを言ったのは、五木寛之だったと思いますね。それから10年後、彼女は引退を宣言し、渡米し、結婚し、子供を産みます。一見、順風満帆、幸福な人生を送っているように思えました。しかし、それから死に至るまでの生活は、結婚と離婚のくりかえし、高額なギャンブル、度が過ぎる浪費癖など、ずいぶん荒れたものであったようです。

私は、彼女については、「ある思い出」があるんですよ。それは今から約40年も前にさかのぼります。その頃の私は、4年間在籍した大学を(横に)出て、いろいろなアルバイトをしながら、生活をしていました。英会話教材のセールス、着物展示会場の設営作業、世論調査、建設作業員等々…いろいろなやりましたね。今で言うフリーター生活、私の東京放浪時代です。その中の一つが、キャバレーのウェイターでした。場所は赤坂、歌手のショーを売りにしている、一流の部類に入る店でした。



私がそこに勤めることにしたのは、時給550円という当時としては高額な賃金にひかれたこともありますが、東京・赤坂の「夜の世界」への好奇心もありました。そして、その店のクリスマスのショータイムに、彼女が出演したのです。その頃の彼女は、すでに歌謡界で安定した人気と地位を手に入っていたと思います。

一年で一番の繁忙期とあって、劇場並みの広い店内は満席状態。私は必至の思いで、客の沢山の注文を捌き、酒や料理や氷を、汗だくになって運んでいました。そんな時、私の耳にステージの歌声が聞こえてきました。♪～ここは東京ネオン街～ここは東京涙街～ここは東京なにもかも～ここは東京うその街♪……藤圭子「女のブルース」との出会いでした。夜の酒場の男と女の喧騒、汗まみれで働きつつ、なぜか私の胸に熱いものがこみ上げてきました。肉声で聞く、彼女の「怨歌」は、その頃の私の「心の波長」に強く響いたのです……



「テレサ・テン」についても、印象に残っていることがありますね。その当時は、彼女は台湾から日本に来て、まだ間もない頃であったと思います。彼女の事を調べてみると、日本デビューは 1974 年ですから、私が見たのは来日して一年くらいだったのでしょう。



私が、ボーイの仕事をやりつつ、舞台の方を見ると、ショーが中断して、彼女がマイクの前で立ちつくしているのです。明らかに泣いて涙を流しているのがわかりました。私は、ずっと舞台を見ていたわけではないので、何が起り、なぜ彼女が泣いたのかは、わかりません。しかし、推測はできます。日本に来て間もない、若い彼女には、赤坂のキャバレーの、わがままな酔客を相手にする生の舞台は、荷が重すぎたのです。どんなに上手に歌おうと、気に入らなければ、汚いヤジが飛んでも不思議のない世界ですから。異国から来たばかりの、当時二十歳そこそこの彼女には、厳しい試練であったと思います。この経験はそれからの彼女の成長の糧になったのかもしれませんが、当時の私は、ただただ可哀想な気がしましたね。

それから苦節10年の後に、「つぐない」「愛人」さらに「時の流れに身をまかせ」などのヒット曲を飛ばし、彼女は「アジアの歌姫」に成長したわけですね。しかし、その後の彼女の人生は、非常に過酷なものでした。日本と台湾、台湾と中国という三国の政治情勢に翻弄され、1995年に42歳の若さで「孤独な死」を遂げるのです。あの時、舞台上で泣いていた乙女が、堂々たる「歌姫」に成長しなぜか政治世界の対立の渦の中に巻き込まれ、若くして人生を終えることになる……人の運命というのは、時に残酷なものです。

「雪村いずみ」さんの場合は「テレサ・テン」と対照的に、陽気で堂々たる舞台でした。彼女は、曲の合間に、客が差し出したグラスを受け取って、乾杯で一気飲みをしていましたよ。私はその時に、ある大胆な行動をしました。サインをもらいに行ったのです。初回のショーの後で、こっそりやったわけです。もちろん店の規則違反で、クビも覚悟の行為です。

控室をノックをしてドアを開けると、彼女は広い部屋に、一人椅子にすわり、テーブルに向かっていました。他には誰もいません。「すみません。サインいただけますか」彼女は顔をあげ、嫌な表情を見せるでもなく、「いいわよ」と気さくな声が返ってきました。部屋にいるのは私と彼女だけ。慣れた手つきでサインをする彼女を見つつ、(何か気の利いたことを言わないと!)。何も言葉が出てこないのです……「ありがとうございます」それだけ言って、部屋を出ました。黒いタイトスカートに黒いセーター、黒で統一されたファッションが、ほっそりとした体形に良く似合い、実に魅力的でした。



調べてみたら、「雪村いずみ」さんは、1937年の生まれで、1949年生まれ私より、ちょうど一回り年上になります。その当時は30代後半の女盛り、20代半ばの私には、眩しいほどの色気を感じました。昭和30年代に、美空ひばり、江利チエミとともに、初代の「三人娘」で売り出し一世風靡しました。ですから、私より少し上の人にファンが多いと思います。しかし、「チエミ」は45歳、「ひばり」は52歳でともに早逝し、「いずみ」さんだけが、残されるという、皮肉な運命になりました。この

世から足早に去って行った二人の分まで、出来るだけ長く現役で頑張っしてほしいものです。40年前、いきなり控室に入っていたボーイ姿の私に、気持ちよくサインをしてくれた「いずみ」さん。陰ながら応援していますよ！

「何かいいことなかったか？」ですか？ そんなもんありやせんですよ。ああいう世界では、ホステスと従業員の付き合いは禁止されているんです。なにしろ女性は「店の商品」ですから。それに、彼女たちは金のある男しか興味がありません。ボロアパートに住む、貧乏なアルバイト青年なんかは相手にしてもらえませんよ。私はその後、店の者とのトラブルもあり、「赤坂キャバレー体験」は三か月程度で終了しました。1970年代の半ば、今では遠い過去の世界になってしまった、私の若き日の風景の一コマです。



「ほうは言うても、色っばい女ばかりの所に入って、なーんにもなかったいうんは、ちいと寂しいもんがあるよのう」